

20 ヨコハマ
トリエンナーレ
20 YOKOHAMA
TRIENNALE
AFTERGLOW
光の破片をつかまえる



展覧会企画概要

2020年4月

ヨコハマトリエンナーレ2020「AFTERGLOW—光の破片をつかまえる」

「AFTERGLOW」というタイトルをめぐって
ラクス・メディア・コレクティヴ(ヨコハマトリエンナーレ2020 アーティスティック・ディレクター)

展覧会という「茂み」について
木村絵理子(ヨコハマトリエンナーレ2020 企画統括)

参加アーティスト一覧

ラクス・メディア・コレクティヴのキュレーションと、ヨコハマトリエンナーレがめざすもの
横浜トリエンナーレ組織委員会

開催概要

ヨコハマトリエンナーレ2020 「AFTERGLOW 一光の破片をつかまえる」

「AFTERGLOW」というタイトルをめぐって

名前には、たくさんの意味が込められています。何と云っても、名前は物語の始まりを思い起こさせます。わかっていることと知らないことをたちまち浮き彫りにし、親近感を引き出し、愛情を招く合図となります。また、時間を超えていくものでなくてはなりません。

名前をつけるには時間がかかり、また時間が求められます。空間を共有することが困難な現在の環境のなかで、今回のトリエンナーレに名前をつけるとするならば、どこにでも浸透するような名前が求められる一方で、トリエンナーレのプロセスに持ちこまれる多数で多様な存在の個性性を濁らせて見えにくくしてしまうような圧倒的な力を持つものは回避されなければなりません。このトリエンナーレはテーマをつけることを前提としない取り組みを進めており、またアーティストや一般の人々を巻き込んで、予測のつかない発見、驚き、洞察を前提とした出会いを生み出そうと試みています。そうしたこともあって、私たちラクスが求める名前は、何かを確定する力は弱くとも、泡のごとく生まれては消えるような生き生きとした興奮に満ちた名前を求めています——楽しさ、魅力、冒険、謎に満ちた名前を。

こうしたことを念頭に置いて、私たちは「AFTERGLOW」というタイトルを提案することにしました。それは、光の間隔、輝くような期待、ゆらめく光の流れ、存在と生成の茂みの間を流れるエネルギー、といったものを表しています。

「AFTERGLOW」というタイトルのもとで行われるトリエンナーレは皆さんを、深い探求と予兆が示すゆらめく輝きの中へとお誘いします。そこでは、まだ起こっていないことやこれから起こることを期待したり予測したりすることと、じっくり考えぬくことや主張を押し通そうとすることが混ざり合います。皆さんには、抑制を忘れ、見知らぬものとの出会いから生まれる鮮烈な喜びを見つけていただければと思います。

このトリエンナーレでは、アートは、気まぐれで、人を戸惑わせるようなゲームに興じます。最近、ますます認知されるようになっていく^{ノン・ヒューマン}と楽しげに親しみをかわし、集団の総意と個人の信念の物語を思い起こし、よく知られたさまざまな力が増減するところを観察し、私たちを毒性への恐怖に立ち向かわせようとしています。

ときにそのアートは、私たちを爆発のもたらす発散物の中へ誘うこともあるでしょう。また深海に潜む生命の存在を示す生物発光という信号となることもあれば、ほかの場所では、友情の輝きとなり、ケアのぬくもりとなり、あるいは独学者の目の中にある直観のひらめきとなるのです。

横浜美術館とプロット48を「茂みを発生させる拠点」と考えてみてください。精神と想像力の生

Photo: KATO Hajime



ラクス・メディア・コレクティブ

(ヨコハマトリエンナーレ2020 アーティスティック・ディレクター)

物学的多様性のための^{シェルター}臨時避難所なのだ。私たちが「社会的距離」という新しい語彙を学び始めたまさにこの時期に、茂みのことを考えてみてほしいのです——それはパンデミックが広める排他的原則とはまさに正反対のものです。密度、没入、絡み合いといったイメージが頭に浮かびます。茂みの中を歩き回っているときに警戒心が高まるさまについて考えてみるのも面白いでしょう。そうしたときには、時間を経験する速度は遅くなります。変容した時間の経験は、共感というかたちをとることもあります。それは思いやりと同じくらい、他人に^{伝染}伝染りやすいものです——そんなときには、接触や接点^{接点}を認識している状態は、その伝染りやすいものを追放するようなこともなく、安全な状態へと戻るための鍵となります。それは、さまざまなかたちや性向をもつ生命を歓迎しているのです。

今回のヨコハマトリエンナーレ2020は、私たちの多様な世界にある多様な流れを誠意をもって受け入れる態度を示します。その最初の瞬間から皆さんに、世界が液体でできている状況をお見せいたしましょう。確実とされる事態への思い込みを溶かし、ぼやけさせ、また周縁を中心として踊らせましょう。そこでは手つかずの自然はもはや文明に対立するものではなく、文化的倫理にありがちな偏狭さは公然と無視されるのです。

「AFTERGLOW」では、空間を思考と感情の複雑なダイアグラムへと変えるような作品を展示します。それは古代のものと濃厚に接触し、時間に身体をこすりつけながら、不確かな未来を見きわめます。破壊された古代遺跡のかけらをつなぎ合わせて、不思議な物体を復元します。またそれは、異国の温室に育つ巨大な花のように咲き誇ります。不死を求めると生命を欲求し、その結果桁違いに大きな宇宙に目を向けることを強めます。困難な愛に向ける熱情を廃墟と化した病院の中に見出す一方で、植物や動物のエロティシズムに対する興味を隠しません。

私たちは、この喧騒と静寂の、加速と迂回の織りなす茂みを歩き回ることによって時間の経験が変容してしまうことを、アーティストや仲間たちともどもお約束いたします。この茂みに入るためのチケットは、幾重にも重なり密度の高い時間を想像しつつ、一見それほど重要ではないものにも注意を払うような時間を共有する機会に皆様をお誘いするためのものです。

それは、自らの光を持って、濃密な流れの中で輝く方法を見つけます。

「AFTERGLOW—光の破片をつかまえる」は、21世紀にアートを作り続けることの意味に光を当てます。

2020年4月
[須川善行 訳]

YOKOHAMA TRIENNALE 2020 AFTERGLOW

A name holds so much within it. After all, it evokes scenarios, it conjures the known and the unknown, it draws affinities, it gestures to affections, and it has to travel in time.

A name takes time, and asks for time. In a milieu that challenges our abilities and capacities to be together, the Triennale needed a name that could permeate everywhere, and yet not become a sole force muddying the multiple and diverse presences brought into the Triennale process. With the post-thematic move that this Triennale is working with, and with its attempts to bring in artists and publics into an encounter that is premised on unpredictable discoveries, surprises and discernment, we, Raqs, wanted a name that was low on determinacy but was full of living effervescence — with all its joys, charms, hazards, and mysteries.

With this in mind we proposed the title “Afterglow” a luminous interval, a glowing anticipation, a lambent flow, a charged current of energy between thickets of presence and becoming.

“Afterglow” invites you to be in proximity to the radiant, fluctuating glow of probes and premonitions, blending anticipation and projection with the calmness of rumination and the pugnacity of assertion. It invites you to lose your inhibitions, and find a vivid joy that can come with meeting the unfamiliar.

Here art plays whimsical and yet disorienting sport; it intimates a playful ease with the growing recognition of non-humans; it recalls histories of collective will and individual obstinacy; it observes variations of known forces, and it draws us closer to confront the fear of the toxic.

Sometimes it invites us to be inside the aura of an explosion; somewhere it is the bioluminescent semaphore that signals life in the depths of the ocean; elsewhere it is the radiance of friendship, the glow of care, or the sparkle of sentience in the eyes of an autodidact.

Imagine the Yokohama Museum of Art, and the Plot 48 as ‘thicket hosts’: temporary shelters for the biological diversity of the mind and the imagination. In these times, when we have begun to learn a new vocabulary of ‘social distance’, think of a thicket — the very opposite of the exclusionary principle that a pandemic unleashes. It brings to mind an image of density, immersion, and entanglement. It is also interesting to think about the state of alertness the mind enters into while navigating a thicket. It slows the experience of time. A transformed experience of time can bring forth a form of compassion that is as caring as it is contagious — where contact, and a state of awareness about being in contact, is the key to a return to safety, without the fear of banishment of the contagious. It is welcoming of different forms and propensities of life.

This edition — Yokohama Triennale 2020 — is deliberately hospitable to the diverse currents of our diverse world. From its very first moment it will cajole people to see the world as made of liquid states, dissolving and blurring our hold on fixed certainties, making edges dance as centers, where wilderness is not opposed to civilization, and where there is a defiance to the assumed insularity of cultural ethics.

“Afterglow” presents works that turn space into complex diagrams of thought and feeling. It comes into close contact with the ancient, rubbing against time to discern untested futures. It reconstructs objects of wonder by piecing together the broken shards of archaeological remains. It blooms like a giant flower in an alien greenhouse. It finds desire for life in its search for immortality, and enjoins incommensurable cosmologies. It locates resources for difficult love in an abandoned hospital, even as it wonders on the eroticism of flora and fauna.

We promise, along with our artists and companions, that in navigating this thicket of clamor and silence, acceleration and detour, the experience of time will be altered. The ticket to this thicket is an invitation to a shared time of alertness to minor notes, along with a reverie in populous folds of time.

It finds a way to glow at dense currents, bearing its own light.

“Afterglow” lights up an awareness of what it means to keep making art in the twenty-first century.

Raqs Media Collective
April 2020

ヨコハマトリエンナーレ2020 「AFTERGLOW 一光の破片をつかまえる」

© 427FOTO



木村 絵理子

(ヨコハマトリエンナーレ2020 企画統括)

展覧会という「茂み」について

ヨコハマトリエンナーレ2020「AFTERGLOW 一光の破片をつかまえる」は、展覧会とともに、それが開催される土地や時間、さらに表現領域から解放し、拡張させる試みとしてのエピソード(註※)を併せて開催するものであり、ここでは主に展覧会で発表される作家・作品の特徴を紹介します。

目下、かつてない不安定な状況下での準備を余儀なくされているヨコハマトリエンナーレ2020に向けて、まるで今の状況を予見するかのようにラクス・メディア・コレクティブが提示したタイトルは、あらゆる物事が複雑に絡み合う世界の中で、思考と知恵の「茂み」の中に流れるエネルギーと、それを自らの手でつかみとろうとする行為を象徴する「光の破片=AFTERGLOW」という言葉です。これは、2019年11月に発表された5つのテキストからなる「ソース」から導き出されたものであり、そこには、人間の探究心や独学で得られた知識、友情や他者への思いやり、有毒なものとの共生といった、既成のヒエラルキーに囚われない価値観が込められています。

では今回発表された参加アーティストたちの作品は、具体的にどのような形で展覧会という「茂み」を形成するのでしょうか。

例えばある一群の作品は、過去に発生した何らかの事象に注目します。その多くは、作家自身やその家族、身近な人たちが体験した出来事に端を発し、そこから世界の歴史や政治だけでなく、科学や医療、生態系の未来など、柔軟かつ自由に思考を拡げ、それぞれの作品世界を展開していきます。またある作品群では、人間の身体がモチーフとなります。身体の脆弱さや他者からの制御。既成の記号的意味を持つ身体が、異なる文脈の中でどのような意味を持ちうるのか。あるいは、また別の記号的意味と合体して変容する場合など、身体そのものの特性やその意味の多様性が提示されます。そしてまた別の作品では、人間の知覚とその認識のメカニズムに目を向けて、私たちが理解している世界というものが、いかに私たちの知覚との相対的関係性の中で成立する、移ろいやすさの内にあるのかを気づかせてくれます。

目下、新型コロナウイルスの世界的流行によって顕在化したのは、その毒性以上に、情報への不信と過信、不確定な未来や他者への恐怖となっているようです。目の前の危機が過ぎ去った時、恐怖の記憶は澱のように人々や社会の其処此処に残っていくかもしれません。こうした世界の中で生き延びていくためには、人間社会のみならず生態系全体の多様性を認め、それぞれが自立して、光を放つように存在することが今まで以上に重要な意味を持つてくるでしょう。ヨコハマトリエンナーレ2020は、現代アートを通じて、私たちそれぞれが不確かな未来への一歩を踏み出す「光をつかまえる」力について考える機会となることを目指します。

※エピソードの参加アーティストについては、その一部をP.5の作家リストで発表しています。

参加アーティスト一覧 (計65組67名)

アーティスト名 (日) ※1	アーティスト名 (英) ※1	生没年	会場	新作 ※2	日本初発表 ※3
ハイグ・アイヴァジアン ◆	Haig AIVAZIAN ◆	1980	プロット 48	○	○
ファラー・アル・カシミ	Farah AL QASIMI	1991	プロット 48	○	○
モレシン・アラヤリ	Morehshin ALLAHYARI	1985	横浜美術館		
ロバート・アンドリュー	Robert ANDREW	1965	横浜美術館	○	○
青野文昭	AONO Fumiaki	1968	横浜美術館	○	
新井卓	ARAI Takashi	1978	横浜美術館	○	
コラクリット・アルナーノンチャイ	Korakrit ARUNANONDCHAI	1986	プロット 48	○	
ローザ・バルバ	Rosa BARBA	1972	横浜美術館		
タイスィール・バトニジ	Taysir BATNIJI	1966	横浜美術館		○
イシャム・ベラダ ◆	Hicham BERRADA ◆	1986	プロット 48	○	○
ニック・ケイヴ	Nick CAVE	1959	横浜美術館	○	○
チェン・ズ (陳 哲)	CHEN Zhe	1989	横浜美術館	○	
ジェシー・ダーリング	Jesse DARLING	1981	横浜美術館	○	○
マックス・デ・エステバン	Max DE ESTEBAN	1959	横浜美術館		○
エヴァ・ファブレガス	Eva FÀBREGAS	1988	横浜美術館	○	○
マリアンヌ・ファーム	Marianne FAHMY	1992	日本郵船歴史博物館	○	○
アリア・ファリド	Alia FARID	1985	横浜美術館		○
ファームィング・アーキテクト	Farming Architects	2017 設立	プロット 48	○	○
イヴァナ・フランケ ◆	Ivana FRANKE ◆	1973	横浜美術館	○	
ラヒマ・ガンボ	Rahima GAMBO	1986	プロット 48		○
ズザ・ゴリンスカ	Zuza GOLIŃSKA	1990	横浜美術館	○	○
アンドレアス・グライナー	Andreas GREINER	1979	プロット 48	○	
インティ・ゲレロ ◆	Inti GUERRERO ◆	1983	横浜美術館	○	○
ニルバー・ギュレン	Nilbar GÜREŞ	1977	横浜美術館		○
ティナ・ハヴロック・スティーヴンス	Tina HAVELOCK STEVENS	1967	プロット 48		○
ジョイス・ホー (何 采柔)	Joyce HO	1983	プロット 48	○	
インゲラ・イルマン	Ingela IHRMAN	1985	横浜美術館	○	○
飯川雄大	IIKAWA Takehiro	1981	プロット 48	○	
飯山由貴	IYAMA Yuki	1988	横浜美術館	○	
岩井 優 ◆	IWAI Masaru ◆	1975	横浜美術館	○	
岩間朝子	IWAMA Asako	—	横浜美術館	○	
金氏徹平	KANEUJI Teppei	1978	横浜美術館	○	
川久保ジョイ	KAWAKUBO Yoi	1979	プロット 48	○	

アーティスト名 (日) ※1	アーティスト名 (英) ※1	生没年	会場	新作 ※2	日本初発表 ※3
レボハング・ハンイエ	Lebohang KGANYE	1990	横浜美術館	○	○
キム・ユン Chol	KIM Yunchul	1970	横浜美術館	○	○
エレナ・ノックス	Elena KNOX	—	プロット 48	○	
ラウ・ワイ (劉 衛)	LAU Wai	1982	プロット 48		
ラス・リグタス	Russ LIGTAS	1985	プロット 48	○	
メイク・オア・ブレイク (レベッカ・ギャロ&コニー・アンテス)	Make or Break (Rebecca GALLO & Connie ANTHES)	1978/1985	横浜美術館	○	○
タウス・マハチェヴァ	Taus MAKHACHEVA	1983	横浜美術館	○	○
カベロ・マラツィ ◆	Kabelo MALATSIE ◆	1987	—	○	○
ナイーム・モハイエメン	Naeem MOHAIEMEN	1969	プロット 48	○	
ジェイムス・ナスミス	James NASMYTH	1808-1890	横浜美術館		
パク・チャンキョン	PARK Chan-kyong	1965	横浜美術館		
アモル・K・パティル	Amol K. PATIL	1987	プロット 48	○	○
アリユアーイ・プリダン (武 玉玲)	Aluaiy PULIDAN	1971	プロット 48		○
レーヌカ・ラジーヴ	Renuka RAJIV	1985	横浜美術館	○	○
オスカー・サンティラン	Oscar SANTILLAN	1980	横浜美術館 / プロット 48	○	○
サルカー・プロティック	SARKER Protick	1986	横浜美術館 / プロット 48	○	○
佐藤雅晴	SATO Masaharu	1973-2019	横浜美術館		
さとうりさ	SATO Risa	1972	横浜美術館 / プロット 48	○	
レヌ・サヴァント	Renu SAVANT	1981	プロット 48		○
ツェリン・シェルパ	Tsherin SHERPA	1968	横浜美術館		○
新宅加奈子 ◆	SHINTAKU Kanako ◆	1994	—	○	
エリアス・シメ	Elias SIME	1968	横浜美術館		
レイヤン・タベット	Rayyane TABET	1983	横浜美術館		○
竹村 京	TAKEMURA Kei	1975	横浜美術館	○	
田村友一郎 ◆	TAMURA Yuichiro ◆	1977	—	○	
デニス・タン (陳 文偉) ◆	Dennis TAN ◆	1975	プロット 48	○	
アントン・ヴィドクル ◆	Anton VIDOKLE ◆	1965	プロット 48		
オメル・ワシム&サーイラ・シェイク	Omer WASIM & Saira SHEIKH	1988/1975-2017	横浜美術館	○	○
ミシェル・ウォン ◆	Michelle WONG ◆	1987	—	○	○
ランティアン・シェ ◆	Lantian XIE ◆	1988	横浜美術館	○	○
ジャン・シュウ・ジャン (張 徐 展)	ZHANG XU Zhan	1988	横浜美術館	○	
ジェン・ポー (鄭 波)	ZHENG Bo	1974	プロット 48		

計65組67名 (2020年4月現在)

※1 ◆: エピソード参加アーティスト
 ※2 ヨコハマトリエンナーレ2020のために新しく制作する作品、すでに発表されたものを本展のために再構成する作品
 ※3 日本で初めて作品を発表する作家

ラクス・メディア・コレクティブのキュレーションと、 ヨコハマトリエンナーレがめざすもの

横浜トリエンナーレ組織委員会

横浜トリエンナーレ組織委員会は、国内外で数多くの国際展や芸術祭が開催される現在、自らの立ち位置を再確認する時期を迎えていると考えています。ヨコハマトリエンナーレ2020では、世界との対話を通して、歴史的・社会的な文脈を踏まえて芸術文化の新たな定義にかかわり、その理解を促すことを目指します。

今回アーティストック・ディレクターを務めるラクス・メディア・コレクティブ(以下、ラクス)は、現代美術をめぐる言説に新たな視野を付与する活動で知られます。彼らは世の中のあらゆる人々とかかわるためには「美術」の定義を拡張する必要があると考え、現代美術の定式化した思考方法を解体し、再構築するようなキュレーションを行ってきました。その根底には、美術などの表現にかかわる知見や知識は一部の人が占有するものではなく、オープンソースとして広く共有されるべきものであるという信念があります。

1) 「テーマ」を発想するのではなく、「ソース」から思考を始める

ラクスは「テーマ」ではなく、思考の源泉となる「ソース」と称する資料を起点にキュレーションを行います。

ヨコハマトリエンナーレ2020の「ソース」は、時代や文化的背景の異なる実在の人物の生き方や考え方を例示する5つの資料で構成されます。そこに登場する人物の生き方や社会とのかかわり方はそれぞれ異なりますが、生活に根差した視点や独自の光を放っている点で共通しています。

ラクスはこの「ソース」を思考の素材としてアーティストに提示します。「独学」から自発的に世界を把握し自ら「発光」すること、光のなかで「友情」を育み他者を「ケア」すること、しかしながら、その光の持つ「毒性」とも共存することについても考えなければいけないこと。ラクスが「ソース」に見出したこれらのキーワードを、アーティストはそれぞれに受け止め、発表する作品につなげていきます。

2) 「トリエンナーレ」とは1000日間継続的に思考する機会である、 その実践として「エピソード」を行う

ラクスは「トリエンナーレ」を3年に1度開催される展覧会としてだけでなく、終了後から次の展覧会に向けた約1000日間をかけて、世界の状況について考える特別な事業としてとらえています。そのため2020年7月から10月まで横浜の会場で開催する「展覧会」に加えて、「エピソード」というプログラムを企画し、展覧会の会期を前後する期間や横浜以外の場所をも視野に入れて、パフォーマンスやレクチャーを行い、アートがどのように現在の世界の状況に回答できるかを熟議します。

プログラムの詳細は後日発表します。

3) 自ら発見し、つかみとるすべを考える

「展覧会」と「エピソード」では、ラクスが「ソース」を起点に構想するコンセプトを受けて、アーティストたちはそれぞれが持つ世界観を観客に提示します。

「AFTERGLOW—光の破片をつかまえる」というタイトルの「AFTERGLOW」は、ビッグバンの爆発の光の名残が現在でも「宇宙マイクロ波背景放射」と呼ばれる電磁波として宇宙に満ちている様子に重ねて、アーティストの作品が放つ光が波紋のように広がると同時にその残光が時空を超えて予想もしなかったところまで届くこと、また当初見えていなかった形で出現する可能性があることをあらわしています。

「光の破片をつかまえる」という言葉のとおり、ラクスはアーティストにも観客にもヨコハマトリエンナーレ2020に参加することにより、これからの時代を生き抜く術をつかみ取ってほしいと考えています。

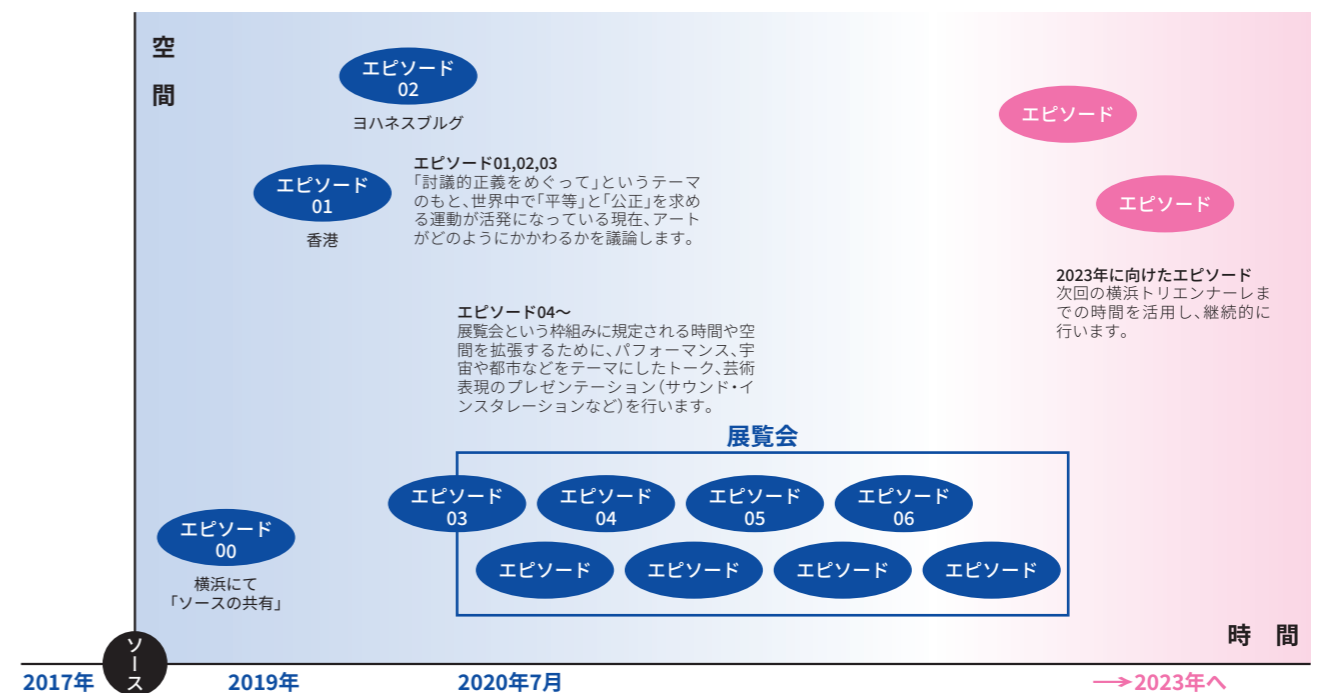
4) 非欧米圏の若手作家の作品を多数取り入れる

「独学」「発光」「友情」「ケア」「毒性」といった「ソース」から導き出されるキーワードに回答する65組/67名(2020年4月現在)のアーティストによる作品が展示されます。

アーティストの出身地の地域的広がりとしては、約半数が日本を含むアジア大洋州、約1/4を中東、中南米およびアフリカが占め、欧米が同じく約1/4を占めています。先端的かつ活発な現代美術の活動の重心が、非欧米圏に移りつつあることを意識しています。

また今回参加するアーティストの約半数が1980年代以降の生まれです。2000年代以降の世界を見つめてきた若い世代のアーティストの存在感も本展の特徴です。

さらに、出品作品には新作または本トリエンナーレのために再構成されたものが多く含まれます。



開催概要

いま最も刺激あふれる現代アートは、横浜から世界へ

ヨコハマトリエンナーレは、3年に一度開催される現代アートの国際展です。

ヨコハマトリエンナーレ2020では、「AFTERGLOW—光の破片をつかまえる」と題し、目まぐるしく変化する世界の中で、大切な光を自ら発見してつかみ取る力と、他者を排除することなく、共生のための道を探るすべについて、みなさんと一緒に考えます。

本展を企画するのは、長年にわたって世界で活躍するインドの3人組アーティスト集団「ラクス・メディア・コレクティブ」です。日本で初めて作品を発表するアーティストはもちろん、本展のために新たに制作される作品やプロジェクトを多数紹介し、いま、最も刺激に満ちた現代アートをお楽しみいただきます。

タイトル	ヨコハマトリエンナーレ2020「AFTERGLOW—光の破片をつかまえる」 Yokohama Triennale 2020 “AFTERGLOW”
アーティストック・ディレクター	ラクス・メディア・コレクティブ
展覧会会期	2020年7月3日(金) — 10月11日(日) 毎週木曜日休場(7/23、8/13、10/8を除く)、開場日数90日
会場	横浜美術館 横浜市西区みなとみらい3-4-1 プロット48 横浜市西区みなとみらい4-3-1(みなとみらい2 1中央地区48街区) *下記会場でも作品の展示がございます。 日本郵船歴史博物館 横浜市中区海岸通3-9
開場時間	10:00-18:00(入館は閉館の30分前まで) ※会期中の金曜・土曜と会期最終日の10/11(日)は20:00まで開場 ※10/2(金)、10/3(土)、10/8(木)、10/9(金)、10/10(土)は21:00まで開場
主催	横浜市、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団、NHK、朝日新聞社、 横浜トリエンナーレ組織委員会

※事業名の総称及び組織名は「横浜トリエンナーレ」(横浜=漢字表記)、第7回展の事業名は「ヨコハマトリエンナーレ2020」(ヨコハマ=カタカナ表記)となります。

《プレスお問い合わせ先》

ヨコハマトリエンナーレ2020広報事務局(株式会社プラップジャパン) 担当: 横澤、本郷、増田
〒107-6033 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル33F
E-MAIL: yokotori2020pr@prap.co.jp TEL: 03-4580-9109(平日10:00~18:00)

《横浜トリエンナーレ組織委員会お問い合わせ先》

横浜トリエンナーレ組織委員会事務局 広報担当: 高橋
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1 横浜美術館内
E-MAIL: press@yokohamatriennale.jp TEL: 045-663-7232(平日10:00~18:00) FAX: 045-681-7606